



Title	モンテニユにおける思考と作品の様式とその進化
Author(s)	竹田, 英尚
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	たけ だ ひで なお 竹 田 英 尚
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	第 8 3 8 0 号
学位授与の日付	昭 和 63 年 11 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	モンテーニュにおける思考と作品の様式とその進化
論文審査委員	(主査) 教 授 赤木 昭三 (副査) 教 授 三輪 正 助教授 柏木 隆雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、モンテーニュの『エッセー』を、その執筆時期によって、初期（1572～1573年頃）、中期（1577～1580年頃）、後期（1585～1588年頃）の三期に分けたのち、それぞれの時期の『エッセー』の諸章について、その構成要素、論の展開、章の構成などの表現形式を詳細、綿密に分析し、それを通じてモンテーニュの思考の方法、思索の歩みを考究しようとするもので、原稿枚数は千百余枚、これに引用原文85ページの別冊を付して、照合に供する。全体は、上記のような論文の目的をしるした序論、本文三章および結論から成る。次に本論文の要旨を述べる。

第一章＜『エッセー』の萌芽＞では、まず『エッセー』執筆以前のモンテーニュの作品、すなわち、その退官の辞、レーモン・スボンの『自然神学』の翻訳、親友ラ・ボエシの『著作集』の献辞などに見られる作者の個性の片鱗を指摘したのち（第一節）、初期の『エッセー』に移り、従来、非個性的と見られてきたこれらの諸章に、すでにモンテーニュの個性が随所にみられることを、さまざまな観点からの分析によって示そうとする。

論者によれば『エッセー』の構成要素は、読書実例、思想例、見聞実例、自己実例、作者の私見の五つに分類される。このうち初期の諸章において圧倒的に多いのは前二者であるが、まず論者は、読書から得た実例の単なる羅列と見える初期『エッセー』の諸章においても、その実例の選択と配列から、現実の流動性と多様性への関心や、事実によって判断力を磨き、思索を練ろうとする精神がうかがえること（第二節）、また読書から得た事例のみならず、経験から得られた事例もすでに少なからず存在し、読書実例を材料にした著作行為から、現実にたいする観察と思索へと発展する傾向が見られること（第三節）、さらには思想例、すなわちギリシャ・ローマの哲人などの古人の意見や思想の引用は、つねに自己の判

断を明確にし、自己の思索を発展させる契機となっていることを示す（第四節）。

また初期の『エッセー』には、物事の多様性と流動性を強調し、論理的な固定化に逆らう思考とならんで、少数ながら論証による普遍化を試みる思考も存在するが、しかしモンテーニュの精神の資質と思想は、明らかに前者に傾いていることを指摘する（第五節）。

ついで『エッセー』の特徴ともいべきモンテーニュの、いわゆる自己描写の起源を論じ、事実を捉えようとする視線が、反省的な思索の活動と相まって、読書実例から自分の見聞した実例へ、さらには自己自身の世界へと深まっていく結果として自己描写があらわれたことを、具体的なテキストに即して論証する。また、これとは別に、いわば心理的な起源として、モンテーニュの内に自己自身を語る内的な潜在的な欲求を認め、その原因を彼の中にある存在感の欠如ともいべき不安に求める（第六節）。

最後に、『エッセー』執筆の動機を探り、無為の中であって心に浮かぶ「夢想」、「妄想」、「魑魅魍魎」を記録しようとしたのだとのべる第一巻第八章の記述は、史実や古人の引用でちりばめられている初期の諸章の外観と矛盾するように見えるけれども、章の展開を導くものがモンテーニュの思索の動きそのものである以上、この記述を真実の証言として受け入れることが出来ると論じる。また執筆の目的については、第一巻第五十章のテキストによって、これを「エッセー」essai、すなわち、対象にこだわらず判断力を行使することによって判断力を磨こうとする「判断の試し」にあると結論する（第七節）。

第二章〈個性の開花〉は中期の『エッセー』を扱い、この時期の『エッセー』諸章に見られる個性の確立を詳述する。

まず中期においても読書実例は多く見られるが、直接的な体験の世界と交流して一体化していく一方で、後期にみられる随想の自由奔放な展開がすでに見られ始めることを示す。そして非論理性、超論理性、あるいはまた統一性の欠如とみえるこのような展開のメカニズムとして、「論点の変位（ずれ）」、連想、「平行構造」などを指摘する（第一節）。

また中期の『エッセー』においては、扱う問題の多様な側面は細かく検討され認識されていく一方で、それらを互いに関係づける論理に乏しいことが示される。そしてこのようなモンテーニュの個性的な思考を、論者は「エッセーの論理」と名づけ、その論理の背後には、論理的な整合性と統一性を重んじ、抽象化、普遍化をめざす認識法にたいする不信、流動する多様な現実の重視、実践智への関心などが存在することを指摘する（第二節）。

つぎに中期の『エッセー』の顕著な特色である自己描写について論じ、いまやその数も増え、役割も大きくなった自己描写が随想の展開の中心となる章も見出されることを示し、最後に、中期の終わりに至って、自己描写が『エッセー』の制作原理として打ち立てられたことに触れる（第三節）。

ついで論者は中期の諸章を、章の構成という観点から綿密に検討する。そして中期において顕著になった紆余曲折に富む展開の複雑さや捉え難さは、技巧や作為の結果ではなく、自らの思索の自然を写そうとする作者の姿勢によって生じたものであることを示す。ただし、唯一の構成らしき工夫として、最初的话题に戻って章を結ぶという意味で「円環の構成」と呼びうるものが、この時期に至ってはじめてあらわれることをも指摘する（第四節）。

最後に初期において「判断の試し」と定義されていた『エッセー』の根本的な性格が、中期においては、

判断力だけでなく、彼の精神の「自然」nature全体にかかわる「生来の能力の試し」へと深化したことを述べ、これらの特徴として未完成、現在性、無責任性、反学問性、主題の無限定性を挙げて、これが自己描写と強く結びつく理由を説明する（第五節）。

第三章＜円熟の『エッセー』＞は、イタリア旅行の経験や宗教戦争の激動期における四年にわたるボルドー市長としての深刻な体験を経たのち、1588年に出版された『エッセー』第三巻にもとづいて、円熟期のモンテーニュの思想とその表現形式を考察する。

まず『エッセー』第三巻においても自由奔放な展開とならんで、経験→吟味→結論へと進む論理的な思考が存在することを指摘するとともに、そこにおいて総合化と体系化への方向が見られないことを再確認したのち、その理由として、思考の対象である事物の多様性、流動性とならんで、認識の主体の側の絶えざる変容を挙げ、さらに日常生活を生きる知恵の重視をも指摘する（第一節）。

つぎに自由奔放な展開を示す『エッセー』のメカニズムを分析し、「論点の変位（ずれ）」と「ずれの展開」、連想、さらには平行、交差、廻行の三構造の存在を指摘する。そしてこれらすべての雛形は、すでに初期の諸章に見られたこと、それが中期を経て後期へと量的、質的に著しくなっていたのは、作者の個性の自然な進化と考えられることを例証する（第二節）。

ついで論者は、今や自己描写の書となった第三巻の『エッセー』における自己描写の多様な機能を分析し、単なる自己認識にとどまらず、人間認識、世界認識へ発展していくその様相を説明するとともに、一方ではまた、すでに初期から見られた自己描写への心理的、感情的欲求が常に認められ、『エッセー』に描かれた自己を、現実の自己の存在の代替物として、存在感を満足させようとする欲求が生き生きとみとめられることを指摘する（第三節）。

また論者は章の構成を取上げ、中期につづいて後期においても、章の構成という全体的秩序が、いわゆる「円環の構成」以外には存在しないことを、いくつかの章に即して論証する。そして『エッセー』第三巻の全13章のうち8章までを占めるにいたった「円環の構成」は、自己描写と自己認識を中心に、絶えず流動する多様な人間と世界と自己自身とをめぐって運動する思索の円運動とも見られ、まさに『エッセー』にふさわしい構成であると結論する（第四節）。

最後に論者は、初期には「判断の試し」、中期には「生来の能力の試し」と考えられていた「エッセー」の根本的性格が、後期においては、精神と肉体のみならず、人生までをつつみこんだ「生きることの試し」となったことをあきらかにし、またこのことは変化というよりも、初期以来の一貫した態度による成熟として理解しうることを示す（第五節）。

結論において論者は、初期から後期にいたる『エッセー』の変化と発展を、「エッセー（試し）」という思考の創造性の追求と見る論者の視点の妥当性を再確認し、将来の研究への展望を示す。

論文の審査結果の要旨

本論文はモンテーニュの『エッセー』を構成する諸章について、まず五つの構成要素を抽出し、それら

相互の関連を調べ、自由奔放とも見える随想の展開の後を辿って、章の構成に及ぶ。このような『エッセー』の具体的な表現形式の綿密な分析から、モンテーニュの思索の根本的な性格に迫ろうとする本格的な研究は、フランス本国においても、最近のトゥルノンの業績以前には存在しなかったと言っても過言ではない。論者はすでに25年以上前から一貫してこの研究に取り組み、ここにその研鑽の成果をまとめた。論者の研究のこの先駆性、独創性はまず高く評価されるべきであろう。

しかも論者は、ヴィレーの画期的な名著にならって、モンテーニュの思索の発展を三期に分け、それぞれの時期の『エッセー』について前述の詳細な分析を試みるのであるが、この場合、ヴィレーのように、三段階の「進化」を強調するだけではなく、三期の間の相違とともに、三期を通じて変わらぬ共通性をも力説し、初期の『エッセー』と後期の『エッセー』の間の著しい表面的な相違も、これを作者の内面に入って理解するならば、同じ「エッセー（試し）」という一貫した基本姿勢を貫き、「試し」という行為のもつ創造性を追求しつづけた同じ一人の人間の軌跡にはかならないことを示した。このようにして、論者がモンテーニュの常に変わらざる個性の自然な歩みを浮かび上がらせえたことは、真のモンテーニュ像の解明に一步近づいたものというべく、この点もまた高く評価されなければならない。

さらに、個々の論点にわたって評するならば、まず、論者の、いわゆる初期の諸章において、モンテーニュの個性が、すでにこのように生き生きとあらわれていることを、具体的な分析を通じ、立証しえたことは、従来の固定した通説を破るものとして評価されてよい。

また従来は、あまりに自由奔放な展開を示すために、ほとんど分析不可能とみられてきた中期、後期の諸章に、具体的に、しかも包括的に分析の手を加え、その展開のメカニズムを明らかにしえたこと、『エッセー』の諸章にうかがえる唯一の構成らしきものとして、中期以降に顕著になった「円環の構成」を発見したことも、この論文のすぐれた功績の一つであろう。

さらに付け加えるならば、特に円熟の『エッセー』を扱う第三章において、論者の長年のモンテーニュについての研鑽、『エッセー』にたいする深い愛着を証するがごとく、論者の筆も一段と自在さを増し、『エッセー』各文が縦横に引用され、適切な例の易々と論者の筆に上るさまを見るのも、この論文の魅力の一つといえよう。

しかしながら本論文にも弱点や不備がないわけではない。まず論者は『エッセー』に見られるモンテーニュの思索の歩みを、ヴィレーにならって、初期、中期、後期に区分するが、このうち初期と中期の区別を具体的に章のレベルで明確にしようとする場合、必ずしも研究者の間で意見の一致を見ていないと思われる。なるほど論者は問題の多い諸章がそれぞれどの時期に属するかについて、個々に、一応説得的な論証を提示しはするが、論者の主張の根幹にもかかわるこの重要な問題は、単に付随的に、あるいは注記のなかで、個々別々に扱われるのではなく、冒頭に一章を設けて、十分に論じられるべきであったろう。

つぎに論者は、分析の対象とするテキストとしては『エッセー』各巻の初版を選び、作者が後年それに施した加筆、訂正は一切考慮しない。これは一つの卓見といえるが、それによって若干の問題が生じることも否定しえない。なぜなら、このことによって、1588年以降、すなわち、いわゆる後期以降の最晩年におけるモンテーニュの軌跡を追求することは断念されざるをえない。そして、その点は論者の今後

の研究課題でもあろうから、ここでは問わないとしても、後期のモンテーニュの思索の実態をうかがう資料としては、論者の対象とした1588年出版の『エッセー』第三巻のほかに、同年、作者が第一巻、第二巻に加えた加筆、訂正が残されているのであるから、論者のように、前者のみを扱って後者を無視するならば、後期のモンテーニュの十全の理解にいささか欠けるところがありはしないか。

その他、論文中に、生硬な、あるいは不適切な用語が散見することを指摘しなければならない。例えば、主なもののみを挙げるならば、論文中に何度も取り上げられる「自己描写」や、第二章第二節の「エッセーの論理」がそれであり、また第二章第四節、第三章第四節の「円環の構成」も十分説明されているとはいいがたく、これらの点についても今後の再考が望まれる。

以上、望蜀をも含めて若干の指摘を試みたが、それらはもとより既述の通りの卓越した諸成果を損なうものではなく、本論文が学位請求論文として十分に価値あるものと認定する。